

# 新白山文学 vol.5

東洋大学文藝サークル“綴”

未来通信機

確定事象のパラノイア

一円

頂上

足跡

スケッチ

3

5

24

28

31

33

未来通信機

rico

「オッスオラひとし！」

それだけ叫んで止まってしまった。失敗したのだろうか。俺の名前はヒトシではない。俺は超有名な発明家になる男、九条雄大だ。今日完成したこと未来の自分に繋がる通信機を売り出し、大金持ちになる予定だ。

しかしどうしたものか。この偉大なる発明品の完成に喜び勇んで、もとい、俺の発明は完璧だがやはり世に出す以上は慎重にいかねばなるまいので、俺は試験的に未来の自分に通話してみたのだ。そしたら俺ではないヒトシという低い男の声が返ってきたのだ。

ちくしょう。どういうことだ。俺の計算が間違っているのか。俺は未来座標をもう一度割り出す計算をはじめた。俺の発明品第一号未来座標計算機に名前を入力すれば三十分後に結果が出る。コーヒーでも飲んで気持ち落ち着けるとしよう。

なぜだ。計算は間違っていない。俺の発明品第一号の故障でも設定ミスでもない。では何がいけないのか。いや、俺の発明に間違いなどあるはずがない。俺は完璧な男だ。私生活においても発明においても完璧さでは俺の右に出るものはない。だから恐らく、未来の俺の方に問題があったのだ。きっと未来で俺はヒトシという男に殺され、未来の俺の家に奴は我が物顔で住んでいるのだ。もしくは設定した未来までの間に何か事故に巻き込まれ、俺の中にヒトシという第二の人格が目覚めたのか。あるいは未来で行われた記憶に関する実験に騙されたか妻を人質にとられたかして哀れ実験体となってしまったのか。今の俺には妻はいないが、大金持ちになった俺に言い寄る女共は後を絶たないだろう。俺の頭脳は優秀であるから記憶の実験に欲しがるのも頷ける話だ。事故などいつでもどこでも巻き込まれる可能性はあるものだし、殺人事件に巻き込まれるのは頂けないが。

いかん。こうしておれん。すぐに家のセキュリティを強化する発明をしなくては。俺の家には発明に関するたくさんさんの重要書類があるのだ。悪用されるわけにはいかない。ましてやそのために命を狙われるなど。さあ忙しくなるぞ。まずは銃を持った犯人が入って来たときに逃げ込むためのシエルターを……。

俺は身動きが取れずにいた。身を守るための偉大なる発明品は増えに増えて、家中を埋め尽くした。窓を外から開けられないようにし、天井や壁は核シエルターと同じ素材のものに変えた。自身が逃げ込むための等身大カプセルシエルターは用途に合わせて二十ある。犯人を追い出す装置が六十四、捕まえる装置が百十

三、すべてこの家の中に詰め込まれていた。倉庫は溢れ、寝室に侵攻し、台所を占領し、リビングも足の踏み場がない。そして一昨日、世界を揺るがす大地震が発生した。部屋の四方を囲む柵から発明品たちが俺に向かって雪崩してきた。見事に埋まって二日が過ぎた。空腹はもう感じない。柵に収まっていた発明品たちはその偉大さを語るような重量を持っていた。俺の足は潰され、顔は角で切って血だらけだ。熱いんだか寒いんだかもわからない。朦朧とした意識の中、電話がなる音が響いた。その音は希望の光に対する感謝のような気持ちにさせた後、すべての元凶に対する憎しみを抱かせた。二日の間静かだった大地はまた激しく揺れ始めた。くそ、このタイミングで。重たい腕を伸ばし、近くにあるリモコンの通話ボタンを押す。

オッスオラ一仕事終えたならさっさとタイムマシンでも発明して俺を助けに来てい。けれど震動で崩れた発明品の角で配線はぶちりと切られた。

# 確定事象のパラノイア

草津出

『オッスオラひとし!!』

長机に置かれている、丸っこい文字でそう書かれたマグネットシートを、僕は見つけた。誰だ、こんなものを書いたのは。いや、本当は誰の仕業か分かつている。咲々だ。咲々咲々(さかさきささ)。僕が彼女に頼んだのだ。このシートに、被害者の名前を書いてくれと。でも、こんな風にふざけて書けとは断じて言っていない。ふざけたのは僕ではなく、咲々個人の判断だ。だから不謹慎だとか、そういう風に言われるのは筋違いだ。少なくとも僕は、この事件に関して、真摯的に向き合っているつもりなのだから。でもまあ、いい。それは些細なことに過ぎない。僕は長机からそのシートを拾い上げて、顔を上げる。

「事件を整理しよう」

僕は部屋をぐるりと見回した。フィギュアだとかポスターだとか、さらには無骨なパソコンなんかもあったりして、文芸部の部屋と呼ぶには余計なものが多過ぎる、雑然とした室内。そして、そこに僕を除いた四人の部員。二人はきらきらした眼差しで、一人は不満げな表情で僕の方を見ていた。そしてもう一人は、スマホを弄り続けていて、僕をまるで見ていない。でもまあ、こんなものなのかもしれない。半分だけでも興味を引けたなら、十分お釣りがくる。他の奴の態度には目を瞑ってしよう、と僕は決めた。

僕の話に興味を向けているのは、咲々咲々と水無前已後(さつきしようご)の二人。

咲々は僕と同じ三年で、この部長。そして一応僕の幼馴染。まあ幼馴染なのは置いておくとして、部長である彼女を引き込めたのは割と大きかった。でも協力的であるというよりは、ただ面白がついているだけのようないでもない。水無前已後の方は、僕の一つ下の二年だ。こっちは引き込むのが容易かった。だって、危険なことにはあえて首を突っ込みたくないというのが、男というものだから。

僕らが首を突っ込みようとしているのは、およそ文芸部の活動とは似ても似つかないものだった。けどそもそも僕は、単なる人数確保のために咲々に無理矢理入部させられただけだったから、その、文芸部らしさというものに殆ど執着がなかった。まあつまり、やりたいことをやっているだけなのだ。それに、今回はノンフィクションを執筆するための取材だという大義名分がある。だから咲々も、僕のことを止めようとはしないだろう。

僕は出来るだけ感情を抑えるように、淡々と話を続けた。

「事件が起こったのは三日前。親善町二丁目の路地裏で死体が発見された。被害者はこの学校の生徒で、死体は全身を数十にわたって滅多刺しにされていた。被害者の名前は安楽醬(あらかきひとし)。二年生。夜、家から外出したときに襲われて、殺されたらしい」

親善町は、この学校の隣町で、事件の現場はここから徒歩で約四十分ほどのところにある。現場には僕も行ってみた。もともと、その時はまだ警察がいたから碌に調査することはできなかったけど。

「現場は明かりもほとんどなくて、かなり薄暗い。人通りも少なく、どうして被害者がここにいたのかもよく分かっていない。けど、この場所は被害者の家から一番近いコンビニまでの直線上に位置しているから、少なくとも警察は、被害者がコンビニに向かう途中で襲われたと考えているみたいだ。第一発見者は近くに住むサラリーマン。会社からの帰宅途中で発見したらしい。あと、警察は発見者の他に、この学校の生徒三人から事情聴取をしている」

「ねえ、高(とおる)」

咲々が僕の話の遮った。

「なんかさつきから、すごい詳しいね」

「そりゃ、校長室の話を盗み聞きしたからな」

「ちようど昨日のことだ。警察が、学校に訪れていた。そして僕はその警察と先生たちとのやり取りを、部屋の外からずっと聞いていたのだ。」

「ええー、良くないよー」

咲々が心配そうに声を上げる。けど僕はそれに、逆に胸を張ってみせた。

「情報収集は調査の基本だ」

結局聞いているのがバレて、摘み出されたけど。まあでも、めぼしい情報は手に入ったから、聞き耳を立てた甲斐はあった。

すると、ずっと仏頂面で聞いていた部員の一人が、眉を寄せながら、文句を垂れてきた。

「ちよつと、あんまり問題起こさないでよね。兄妹の私にまで迷惑かかるんだから」

車尾果実(くずもみのり)。二つ下の、僕の妹。でも、あまり仲は良いとは言えなかった。いつも僕のやろうとするものの、邪魔立てばかりしてくる。わざわざ僕と同じ部活に入部してきてまで僕の邪魔をしてくるあたりに、こいつの、底意地の悪さを感じ取ることができる。

「僕は別に、迷惑かけた覚えはない」

僕は精一杯の嫌みを込めて言った。

「何言ってるの？ 毎回先生たちからお小言聞いているのは私なんだから」

そんなこと、僕が知るもんか。僕の妹でいるから悪いのだ。

「第一、なんでこの部活に入ってきたんだよ。僕がそんなに嫌なら別の部活に入れば良かったのに」

「それは」

「高のこと、心配なんだよね？」

咲々が横から茶々を入れた。果実はさらに眉を寄せた。

「は？ 違うし」

「はい、ツンデレ頂きました！」

そう言っただけを囁き立てたのは水無前だ。

「俺正直、高先輩がうらやましいっす。先輩のことお義兄さんって呼んでもいいすか？」

「やめろ、気色悪い」

僕と果実の関係を知らないからそんな口が利けるのだ。兄妹なんてそんなに良いものじゃないし、ましてや他人に兄といわれるのなんて、吐き気がする。

僕は溜息を吐いた。こいつらに構っていると、話がまるで進まない。

「話を戻すぞ」

僕は半ば強引に雑談を止めてから、事件の話を再開した。

「さっきも言ったように、警察は三人の生徒に対して事情聴取を行っている。その三人と、被害者の関係はこうだ」

僕は後ろの黒板に、『オッスオラひとし!!』と書かれたマグネットシートを貼る。

「まずは安楽醬、被害者だ。二年三組。引きこもりがちで、あまり学校にも来ていなかったらしい」

「引きこもり？ イジメかなんかつすか？」

水無前の声に、僕は頷く。

「ああ。なんでも、学校のほうでいざこざがあったらしい。まあそれに関わってくるのが、事情聴取を受けた例の三人になる訳だけど。とにかく、そのせいで安楽は学校を休みがちになった。そしてそれ以来ゲームにのめり込んでいて、外に出ることも、殆ど無かったみたいだ」

「ゲームって？」

咲々が首を傾げる。

「オンラインゲームだよ。MMORPGの、えつとなんて言ったっけな」

その時、ずつとスマホを弄っていた綿貫四華（わたぬきてとら）が、ぼそつとした声で言った。

「……ユグドラシルオンライン」

「よく知ってるな」

「知ってるに決まってる。四百万人が遊んだ超大作オンラインゲーム……これ常識。もち私もプレイ済み。あと……安楽醬のことも……噂は知ってる。同じ学年にユグシルのトップランカーがいるって……いや今は『いた』か……フフ。ちな私も安楽ほどじゃないけど相当やり込んでる。もう全職レベMAXだし、グロリアスソードも九本ゲットした……これ、敬つてもいいレベル」

また始まった。彼女、綿貫四華は相当なゲーム好きで、喋り始めたらゲームに関する蘊蓄が止まらない。まあ、悪い子ではないのだけれど。

「ありがとう。もう十分だ」

僕が制すると、四華は不満げに顔をしかめながらも、再びスマホの画面へと戻っていった。

「まあそういう訳で、安楽と接点のある人間は、実はあまり多くはなかった。そんななか、浮かび上がってきたのはこの三人」

僕は新たに三つのマグネットシートを、黒板に貼り付けた。

「一人目は、師走崎聖夜（しわざきいぶ）。安楽醬と同じ、二年三組の男子生徒だ。彼は去年の十二月、財布の盗難騒ぎを起こした。彼は自分の財布がなくなつたと訴え、その結果、犯人として引きずり出されたのが、安楽醬だつたという訳だ」

「安楽くんは、本当に犯人だつたの？」

咲々の当然の疑問に、僕はかぶりを振った。

「さあね。結局安楽は犯人にされてしまった。だけど正直、僕は安楽は無実だつたんじやないかって思ってる。安楽は、ずつと無実を主張していたんだ。そりやもう、必死にね。でも、安楽に耳を貸す人間はいなかった」

「なんでつすか？」

「簡単な話だ。クラスでの立場が違ったんだ。スクールカーストってやつだよ。それに、師走崎は女子の掌握も上手かった。顔も良かったしね。まあ、結局は見てくれが第一、それ以外は全部二の次つてことかな。世知辛いね。まあそれで、安楽は瞬間に孤立した訳だけど。でも安楽を陥れたのは師走崎一人だけじゃなかった。安楽が犯人だという、証言者がいた。つまりそれが、二人目の遁走輪（ふうがのん）と、三人目の指南川心麻（しながわあるま）なんだ」

「でもさ、ちよつとおかしくない？」

すると果実が、凶々しくも口を挟んできた。こいつは例によって、また僕の邪魔をするつもりなのか。僕は苛立ちを抑えながら聞いた。

「なにが？」

「だってさ、安楽って人を犯人呼ばわりしたのは師走崎な訳でしょ？ だったら、安楽のほうには恨みがあっても、恨まれる理由なんて、どこにあるの？」

なるほど、果実にしては良いところを突く。確かに、その三人には動機が全く存在しない。

「それに、そもそもどうして犯人が、この学校の生徒だと思ふ訳？ 安楽は誰からも恨まれてないし、状況から考えたら、犯人は安楽と面識のないただの通り魔だった、って考えた方が自然じゃない」

「そこまで言うと、果実は言いたいことは終わったとでも言いたげに、腕を組んでみせた。顔にはまるで、勝ち誇ったような笑みが張り付いている。おおかた僕のことを言い負かしたとでも思っているのだろう。」

でも、果実は、一つだけ重要な要素を見逃していた。

僕は言った。

「確定事項だ」

果実は僕の言った意味を測り兼ねたらしく、露骨に顔をしかめた。

「は？ なにそれ？」

「まったく、物分が悪いな。これだから果実は嫌なんだ。」

「考えてみるよ。もしも犯人が被害者とまったく関係のない人間だったとしたら、僕たちにはもう手掛かりは何もないじゃないか」

「だから何？」

「僕は絶対にこの手で犯人を捕まえる。これは確定事項だ。そしてそのためには、犯人はこの学校の関係者でなくちゃいけない。これも、確定事項だ」

「そう、確定事項。僕は必ず犯人をこの手で捕まえる。でもこの、犯人を見つけたいという欲望は、単なる好奇心などではなかった。言ってみればそれは、僕が僕であることを否定しないための、一つの手段。」

部屋にはいつしか沈黙が降り立っていた。僕が無茶を言ったからかもしれない。この強引な推論、いや願望といったほうが良いかもしれないが、それが無茶だということも自分でも十分分かっていた。でも、僕はそれを言わずにはいられなかったのだ。一度言葉にしてしまえばそれは、現実になっていくような気がしたから。

すると咲々が、その沈黙を破るように口を開いた。

「つまり高は、自分たちで犯人を見つげるために、ある程度容疑者に当たりをつけて調査をしよう、って言いたいんだよね？」

さすが咲々。僕と付き合いが長いのは伊達じゃない。彼女は僕の言いたかったことを、的確に言い表してくれていた。でも、僕のその言葉を理解できたのは、どうやら咲々だけのようだった。

「バカじゃないの？ これ以上は付き合ったらんないし」

果実はいきなり立ち上がったかと思うと、自分のカバンを引ったくるように持ち上げた。

「帰る」

僕を一瞥して鼻を鳴らすと、そのまま部屋を出ていく。その姿が気に入らなかつた。僕はそれを、姿が見えなくなるまで睨みつけていた。

「……じゃあ俺もそろそろ帰るっす、バイト間に合わなくなったら困るんで」  
空気が悪くなつたのに耐えかねたのだろう、水無前も、果実に続くように立ち上がった。

「明日もたぶん、ここには顔出すんで。失礼するっす」

申し訳なさそうに、水無前は出ていった。残った四華も、スマホを見つめることをやめないまま、カバンを掴み、無言で帰っていく。

部屋に残つたのは、僕と咲々の、二人だけだった。

「……二人つきりになっちゃったね」

咲々は、困つたように笑つた。

「どうしよつか、これから」

僕は窓越しに空を見上げた。もうすぐ日が暮れそうになってはいたけど、完全に沈みきるまでには、まだ少し余裕がある。

「ねえ高、提案なんだけどさ」

咲々が僕を上目遣いで見上げた。

「事件の現場一緒に行かない？」

「え？」

僕は、咲々の言葉に少し、面食らつた。  
咲々からそんな積極的な提案がくるなんて思つてもいかなかった。この事件の調査は、僕が勝手に始めたことではしなくて、咲々には手伝う義理なんて何もなかったからだ。だから僕も、今までずっと他人の手を借りず、一人で調査を続けていた。それなのに、なぜ咲々はそんなことを言い出したのだろう。

「……別に、構わないけど」



少しためらいがちに言うと、咲々は急かすように僕の腕を引っ張った。  
「じゃあ、いこう？」

殺人現場はこの町、加賀見町の隣町である、親善町にあった。親善町自体は、学校から三十分ほどで行くことができる。でも、ちょうど町の境目のところに、JR加賀見台線の線路が伸びていて、二つの街を東西に分断しているのだ。その線路には一つだけ、踏切が存在していて、僕らはそれを跨いで現場を目指す。踏切を越えた後は、もうあと十分も歩けば目的地に到着だ。

僕と咲々は互いに一言も会話をしないまま、歩き続けていた。咲々とは、今まで飽きるほどくだらない会話を重ねてきたはずなのに、今日に限って僕は、彼女に話しかける術を持っていなかった。でもそれは咲々のほうも同じなのか、ずっと黙ったまま、僕にその歩幅を合わせている。

咲々は、僕のやろうとしていること、つまりこの犯人暴きを、どう思っているのだろうか。僕は不意に思った。咲々とは長年付き合っているのに、僕は彼女の考えを理解できた試しがなかった。言い換えると、咲々は、気まぐれなのだ。理屈に裏付けされた思考を持ち合わせていない。逆に言うと、彼女に言わせれば僕は、考えていることが分かりやすいらしかった。理屈を優先支え過ぎていて、とも言われたことがある。もともと、僕にはそんなつもりなど、まったくないのだ。

僕は咲々のほうを見た。咲々は今、何を考えているんだろうか。分からない。咲々はただ、歩きながら自分のつま先を見つめながら歩き続けていた。でも、やがて僕の視線に気付いて、ぼつが悪そうに笑う。

「……果実ちゃんとは、まだ仲直りできてないの？」

咲々が不意に、そう僕に問いかけていた。僕はその答えを、持ち合わせていなかった。だって、僕は、果実ともう一度家族として振る舞えるビジョンをまだ見いだせていなかったから。

「高も分かっているんでしょ？ このままじゃいけないってこと」

咲々は少ししたしなめるような口調で言った。

「別に、僕は果実と喧嘩してる訳じゃない」

僕は、咲々に精一杯の抵抗をしたくて、そんな言葉を口にした。でも、咲々は僕がそう言うということを最初から知っていたみたいに、僕の言葉をすんなりと受け流した。

「まだ、ヒーローになりたいって、そう思ってるの？」

咲々は、そう寂しそうに言った。僕は、咲々の言いたいことがよく分からなかった。確かに、僕は子供の頃、ヒーロー物のアニメや特撮が好きだった。咲々の前で、自分が活躍する妄想の英雄譚を語ったことだってある。けど、そんなものはとうに卒業したし、なりたくないなんて、もうこれっぽっちも思ってもいない。

「冗談はよせよ」

僕がそう言うと、咲々は、

「うん、ゴメン」

とだけ、消え入るような声で、頷いた。

そんな咲々の横顔を見ながら、僕は、なんとなく考えた。いつ頃から、僕は、ヒーローの存在を信じるのをやめたんだろうか、と――。

「あ、そういえば」

ふと、咲々が、思いついたように言った。その顔には、もう寂しさは張り付いていなくて、代わりに笑顔が咲いていた。

「このへんに、すごく美味いお菓子屋さんがあるんだって」

僕はその顔を見て、悟った。咲々が突然事件の現場を見ようと言い出した理由が、これだったということ。

「僕は出さないぞ」

「けち」

「何とでも言え」

でもたぶん、結局付き合うことになるのだろう。それはなんとなくだけど、予想できた。

「そんなことよりも、早く現場に向かうぞ」

だからせめて僕は、その抵抗とまでに、目的の現場までの道を急かした。そんなことしたって、どうせ咲々に振り回される未来は、変わりはないのだろうけど。

「えー、まってよー」

僕は文句を言う咲々の手を引っ張りながら、殺人の起こった場所を目指した。目的地は、周辺住民ですら滅多に寄り付かないような、薄暗い路地裏だ。僕らは、近くの親善通りという大きな通りから、道を外れるようにしてその場所へと入る。

現場は、警察はもう検証を終えたのだろう、もう何も残っていなかった。僕等はそこに足を踏み入れる。障害なんて何も無いはずなのに、なぜか僕は、そこへと向かう自分の足に重さを感じていた。

「なんか、ちよつと気味悪いね」

咲々がそう呟いた。それに関しては、僕も同感だった。もしかしたら、まだ被害者の思念がそこに残っているのかもしれない、なんてまるでオカルトチックな思考に囚われそうになる。でもそれを振り払うようにして、僕は奥へと進む。

そこはもうすでに、ただの路地裏ではない。僕らがこの場所に、そんな奇妙な感覚を覚えてしまうのは、きつと、ここで起こったことを知ってしまったているからなのだろう。

「被害者は、この道を通ってコンビニに向かおうとしていた。そして、何者かに刺殺された……」

現場の先には、まだ道が続いていた。コンビニへと続く道だ。本来ならば、被害者はこの先を進んでコンビニへと向かう筈だったのだろう。

でも、僕はなぜか、道の先、細く入り組んだその先に、小さな違和感を感じていた。

その違和感を探し出そうとして、僕は辺りを見渡す。そして僕の目が、一つの電柱を捉える。そこに何か、引つ掻き傷のようなものが残されていた。僕はそれに、目を凝らす。

「……六芒星？」

見逃してしまいそうなほどの小さな傷。でもそれは確かに、綺麗な六芒星の形をしていた。一昨日警察の話を読み聞きたときは、電柱の、こんな傷の話は出てこなかった。これは果たして、この事件に関係しているのだろうか。

でも、感じていた違和感は、まだ拭えなかった。この狭い路地裏、そして、この路地裏を『あえて』通ってコンビニに行った安楽醬……。

その時、僕の脳裏にある考えが過った。

「咲々、地図を出せるか？」

「あ、うん」

僕は咲々に、加賀見町と親善町の周辺地図を持たせていた。咲々は、僕の指示に従って地図を広げた。

そこには被害者、安楽醬の家と、安楽醬が向かったとされるコンビニの位置がマル印で、そして事件現場がバツ印で示されていた。僕が分かりやすいように、あらかじめ付けておいたものだ。そしてその三点は、確かに、直線を描いている。でも。

僕は確かめるように咲々に尋ねた。

「なあ、僕たち、どうやってここに来たんだっけ？」

咲々は、僕の聞いた意味が理解できないというような顔をして言った。

「それは、親善通りから曲がって……」

「そうだ」

咲々の言葉に僕は頷いた。

「ここへたどり着くには親善通りを通るのが一番手っ取り早い。そして、親善町通りからでも、例のコンビニには辿りつける」

咲々の目が丸く見開いた。どうやら、僕の言わんとしていることが分かったらしい。それでも僕は続ける。

「確かに地図上は、この現場は、コンビニまでの直線上に位置している。けど、こんなに暗くて入り組んだ路地裏を進むより、すぐ近くの親善通りを経由して進んだ方が、断然速かつたはずなんだ。つまり被害者の安楽が、本来この場所に足を運ぶ必要は、まったくなかったんだ」

そして、この事実によって導き出されるものは一つ。

「これはやっぱり通り魔殺人じゃない。安楽醬は誰かにおびき寄せられて、この場所へと向かった」

つまり。

「安楽醬は、彼を知る誰かによって、必然的に、殺されたってことだよ」

——犯人は、学校の関係者。

僕の突拍子もない推論が、次第に現実味を帯び始めているということに、いつしか僕は気が付いた——。

僕には親がない。

その事実を知ったのは、今から約八年前、僕がまだ小学生の時のことだ。

僕はそれまで、自らを父親と、そして母親と名乗る彼らを、自分の本当の両親だと信じて疑っていなかった。

きっかけは、非常に些細な違和感だった。僕は、アルバムのある時点から、自分の写る写真が存在していないことに気が付いた。はじめは、たまたま写真がないだけなのかと思った。例えば紛失してしまったとか。でも、妹の果実が写る写真はいくらでも見つかるのに、僕の写真だけがないという事実、どうしても疑問が拭えなかった。

そしてある時、僕は両親に尋ねる。自分の脳を掠める、恐ろしい妄想を否定してほしくて。

しかしその願いは、もろくも崩れ去る。

気付けば僕は、家を出ていた。

行く当てはなかった。ただ、偽りの記憶を思い出さなくて済むくらい、遠くに行きたかった。

いちばん遠くまで行ける切符を買った。電車に乗り、揺れに身を任せる。

もう戻りたくはない。家族が家族じゃなかったという事実も十分ショックだったけれど、それ以上に、彼らが、僕にそれをずっと隠していたということが辛かった。家族じゃない僕を、一体どんな目で見ていたのだろうか。何も知らない僕を、嘲笑っていたのだろうか。そんな考えが、頭の中をぐるぐると回り続け、やがて僕は、思考停止する。

そうしているうちに、どこまで進んだだろう。窓の外で移り変わっていく景色は既に、僕の知らないものへと変わっていた。でもそんなことは、僕にはあまり関係のないことだった。自分の存在をすっぽり覆い隠してしまえるのなら、どこでもよかったからだ。

そのまま電車は、とあるカーブへと差し掛かる。

その時だった、異変が起きたのは。

いつの間にか、体が大きく傾いていた。そして、次の瞬間、襲い掛かる大きな衝撃。

——JR福地川線脱線事故。

百人近くの死者を出した、過去最悪の脱線事故——。

僕は全身の痛みを必死に耐えながら、歩いた。

そこはさながら地獄だった。

泣き叫ぶ者。助けを呼ぶ者。もう、助けを呼ぶことすらできない者。

僕も醜いくらいに泣きじゃくりながら、助けを求め続けた。救助されるまでの

時間は、永遠にも感じられた。

救助された後も、僕は震えていた。震えが止まらなかつた。

事故が起こった瞬間。あの体が宙に浮く感覚が、何度も何度も頭の中で繰り返されて、僕はそれを振り払いたくて、膝を抱えて、小さくうずくまつた。

そうし続けて、何時間が過ぎた頃だったろうか。どこからか、聞き覚えのある

声が聞こえた。

僕は耳を澄ませた。

それは、父親と母親、そして妹だった。

三人は僕の名前を呼んでいた。やがて、僕の姿を見付け、こちらへと近づいてくる。

それを眺めながら僕は、なんでここにいるんだろうかとか、咲々が教えたんだろうかとか、そんなことを考えていた。でも、それを考えていたら、急に涙が出てきた。

家族も僕のことを心配してくれて。

まだ僕は、そこにいてもいいのかもしれない、と思った。

まだ、時々フラッシュバックすることがある。八年前、僕の身に降りかかった、あのときの悪夢。僕は途端に呼吸困難に陥って、でもそれは、まるで嘘だったかのように、すぐに治まる。もちろん、もう普通の生活を送るのには何の問題もない。でもそれによつて与えられた傷は、自分で思っているよりも存外に深く、まだ奥底に根を張っているのかもしれない。

僕は悪夢を振り払うように、着替えを始めた。まだ学校が始まるまでには時間があるけど、関係ない。

階段を降りると、果実が食卓で朝食を食べていた。果実は僕に気付くと、睨みつけてくる。僕はそれに見ないふりをした。そのまま玄関へと向かう。朝食は普段から食べていなかった。お腹が空かないという訳じゃないけど、もう慣れた。家族と一緒に食卓を囲むという事に、まだ少し抵抗があるのだ。夕食は仕方ないにしても、朝はできるだけ避けたい。

扉を開けると、そこには咲々が立っていた。

「おはよ」

「おう」

お互いに一言だけの、挨拶を交わす。

咲々は、いつも果実と一緒に学校に通っている。だから今日も、家の前で待っていたのだろう。

僕は咲々に言った。

「ここで待ってるくらいなら、中に入ればよかったのに」

すると咲々は、からかうように言う。

「だって高、私がいるって分かったら降りてこないでしょ？」

僕はその、まるですべて見透かしているような物言いが気に入らなかつた。だから何も答えず、歩き出す。

すると、僕の方をじっと見ていることに気付いた。

「なんだよ」

「高は、一緒に行かないの？」

「なんで」

「一緒に行こうよ」

「嫌だ」

「けち」

咲々は、笑っていた。

僕は溜息を吐くしかない。そうやって咲々は、いつも僕をおちよくるのだ。結局僕は、足を止めなかつた。

「じゃ、また、学校でな」

「うん」

咲々の返事を背にして僕は、学校へと向かつた。

学校までは、電車で三駅先のところにある。JR加賀見台線で一本だ。加賀見台線は西側に事件のあつた親善町が見え、僕は電車で揺られながら、その町を眺めていた。

町は、いつもと同じような景色を湛えていた。流れていく景色は余りにも変わり映えがなくて、たった一人が死ぬことなんて、きつと誰も気に留めることはないのだろう、と少し感傷的な気分になつた。

学校について、校舎の中に入ってみると、なんだか妙な感じがした。気のせいとか、学校全体が少し騒がしいような気がする。教師たちも、どこか落ち着きがないように見えた。僕は彼らを尻目に、教室へと向かう。

教室もまた、ざわざわと騒がしかった。咲々はまだ、来ていなかった。当然か、彼女を置いて先に学校に来たのだから。僕はその辺のクラスメイトを適当に掴まえて、尋ねた。

「なあ、何があつたんだ？」

すると、その男子は、少し困惑気味に答えた。

「また、起こつたらしいぜ」

「なにがだよ」

「そりゃ、もちろん——」

僕は驚きを隠せなかつた。本当はこうなる予感はしていたのかもしれない。あるいは、こうなることを期待していたのかも。でも、この少しずつ現実と乖離していく感覚に、僕は目眩を覚えていた。もしかして、今の僕は、どこか夢の中にいるのではないだろうか。

ただ、そのクラスメイトは、はつきりと、こう言つた。

殺人事件、と。

放課後になるのが、こんなに待ち遠しかったことはない。事件が、今まさに、大きな動きを見せているのだ。授業なんて、殆ど耳には入らなかつた。早く終われ、と心の中で唱え続けることで、やり過ごす。高校生という身分が、こんなにも煩わしいと感じたことはなかつた。

放課後になるや否や、僕は真つ先に部室へと向かつた。咲々は、もう教室にはいなかった。先に部室へと行つたんだらうか。だとしたら、なんてせつかな奴なのだろうと思つた。

僕は部室の前に着くと、扉を勢いよく開けて中に入った。でも、咲々の姿はそこにはなかつた。室内にいるのは、四華の一人だけ。疑問に思いながらも挨拶をする、と、四華も小さく会釈を返した。

さすがに来るのが早すぎたのらうか。けどまあ、いい。もともと僕一人でやり始めたことなんだから、他の部員に協力を仰ぐこともない。

僕は地図を引つ張り出してきて、聞いてきた情報を元に、事件の起こつた場所と、最低限の情報をメモする。そしてその間、僕は四華に聞いてみた。

「新しく事件が起こつたのは、知つてるか？」

四華がこくりと頷くのを感じた。どうやらやはり、学校中がその話題で持ち切りなのらうだつた。

「僕はこれから、その事件の現場に行つてみる」

行動は速いほうがいい。もたもたしている間に、重要な証拠がなくなつてしまふなんてことが、あるかもしれない。

「悪いけど四華は、ここについて、みんなが来たら僕が現場に行つたってこと伝えなくていいか？」

たぶんそのうち咲々が、それに果実や水無前もここに来るだろう。あいつらが僕を心配するなんて器用な真似をするとも思えないが、取り敢えず行き先くらいは伝えておいた方が良さだろう。

僕は地図を畳んで、部室から出ようとした。

「あ、あの……」

でもその時、四華が、僕の背中を呼び止めていた。

「どうした？」

「その現場に行くの、私も付いて行っていいですか……？」

「え？」

意外だった。僕の方から誘ったならともかく、まさか四華のほうから興味を示すなんて。普段なら、椅子から一步も動こうとしないのに。

「なんだ、興味あるのか？」

「ろ、ロイトン教授シリーズ、全作プレイ済みの私に死角はない……フフ」

なんだかよく分からないが、妙にやる気みたいだし、特に断る理由もなかった。

「分かった。じゃあ僕は廊下で待つてるから、早く支度をして出てこいよ」

「……らじゃ」

そして四華は、そそくさと立ち上がった。

第二の事件。殺されたのは一年の女子、九重来（このえこの）。クラスは三組。誰にでも明るい気さくな人物だったそうで、しかも中学時代テニスで全国大会に出場し、高校でもその活躍を期待されていたようだ。というのが、ざっと調べてみて分かった被害者の情報。

第一の被害者、安楽醬とは面識はなかったらしい。それもそうだろう、学年が違うのはもちろんだし、根暗な安楽と気さくな九重、性格から性別まで何から何まで違う。言ってみれば二人は真逆の存在だった。これまでの容疑者三人——といつても僕が決めているだけだが便宜的に——についても特に接点はなく、なんだか犯人に嘲笑われているかのようで、あまり良い気分がなかった。

「けど、この事件の発生ではつきりしたことがある」

僕は隣を歩く四華に言った。四華は黙っていたが、僕の方を見ていたので、そのまま続ける。

「今回の事件が起こったのは、加賀見町の南側、学校から歩いて約十五分のところにある坂道だ。前回の現場からは、六十分近く離れている訳だけど、僕はこの事件の話聞いた時、これが連続殺人事件だとすぐに確信した。なぜだか分かるか？」

四華は、首を横に振った。

「九重来は、ナイフで全身を滅多刺しにされて見つかったらしい」  
横で、はっと息を飲むのが分かった。

「二人が全く同じ方法で殺された。つまり、よっぽどひねくれた考えをしなければ、この二件は同一犯の犯行ということでもまず間違いない。そして、そうなると、犯人がこんな酷い殺し方をした理由も見えてくる」

そもそも第一の事件では、被害者が動かなくなっただ後も、執拗にさし続けた形跡があったらしい。今まで、なぜ犯人がこんなことをしたのかが謎だった。最初は、被害者に強い恨みを人間の犯行だと思っていた。現に警察も、被害者の周囲の交友関係を洗っていた。でも、本当は違う。

「犯人は、自分の犯行が連続殺人だということを強調させるために、あんな目立つ殺し方をしたんだ」

それに、僕にはもう一つの根拠がある。

「第一の事件の現場には、六芒星のマークが残されていた」

僕が偶然見つけた、電柱に刻まれたあのマーク。

「あの六芒星のマークも同様に、連続殺人を強調図けるものだとしたら。今から向かう現場にそれが残されていれば……」

「事件はまだ起こる。確定事項だ」

「異議あり！」

「え？」

「あ、いや、ちよつと……一つだけいいですか……？」

四華はいきなり大声を出したかと思うと、耳を真っ赤にして俯いていた。

「ああ、いいけど……」

「その、二人とも同じ人に恨みを買っていた、という可能性はないんですか？」

「その可能性は低いと思う。二人は学年も違うし、まったくと言って良いほど接点がない」

「でも……それじゃ、なんで二人は殺されたんですか？ 犯人の動機は……？」

「う、それは……」

しまった。そういえば全く考えてなかった。

「えつと、その……保留で」

なんだ、今まで後輩に得意気に喋っていたのが、恥ずかしくなってきた。僕は四華から目を逸らした。

「……フフ」

四華の笑う声が、なんだかくすぐったかった。

そうしているうちに、いつの間にか僕らは例の現場に到着していた。  
「ここか……」

坂の傾斜はあまりきつくはなかった。けど、思っていたよりも道幅は狭くて、周辺には人気もない。街灯も少なく、事件があった時間は、かなり薄暗かったに違いない。

事件のあった場所には、現場保全のための黄色いテープが張られていた。でも幸い、今は警察がいらない。僕は躊躇することなく、それをくぐった。

「あ、えっと……」

四華が戸惑うような声をあげる。僕は四華を手で制した。

「四華は、そこで待っていてくれ」

四華が頷くのを見て、僕は奥へと進んだ。

現場は、本当にここが事件のあった場所なのか疑わしくなるくらい、何もなかった。死体がないのは仕方がないとして、もう血痕すら残っていない。やっぱり学校をサボってでも行くべきだったかもしれない。僕は、呑気に授業を受けていた昼間の自分が恨めしかった。

まあでも、悔やんだって仕方がない。僕は持ってきたデジカメを取り出す。部屋に放置されていたから、適当に拝借してきた。誰のものかはよく分からない。でも、あの部屋にあるものは殆ど共用みたいなものだから、特に文句も言われな

いだろう。デジカメで周囲を記録していく。一見何も無いように見えるけど、何がヒントになるか分からない。だから念入りに、僕は目を凝らした。

特にあの六芒星のマーク。あれさえあれば、僕の推論が、より現実味を帯びるはず。

でも僕の期待に反して。

あの六芒星のマークは、この事件の現場にはなかった。

僕は子供の頃、ヒーローの存在に憧れていた。

日曜の朝は、必ずテレビに囁り付いていたし、オリジナルのヒーローを考えてみては、毎回咲々に披露していた。咲々はいつもまじめに聞いてくれていたけれど、今になって思えば、もしかしたら鬱陶しかったのかな、なんて気もする。

でも僕には、そんな想像をしたりするのが、楽しかった。そして、ヒーローは、本当にどこかにいるのだと。

誰かがピンチの時にはヒーローが助けてくれるのだと、本気で信じていた。たとえ僕がピンチになったとしても、きっと誰かが助けてくれるって――。

僕は焼けるように痛い全身に鞭を打ちながら、ゆっくりと立ち上がった。そこはさながら地獄だった。

座席は無残に破れ、手すりは蛇がうねるように曲がり、つり革は地面に転がっていた。空気中には、煙と油の臭いが充満していて、そしてそのなかに微かに混じる、独特な臭気。

僕は助けを求めるようにして、立ち上がっていた。涙で視界が歪んで、よく見えなかった。それを必死に、袖で拭う。

僕は誰かいないか、周囲を見渡した。動いている人は、一人もいなかった。持ち主を失った携帯電話の着信音だけが、その場で延々と、鳴り続けている。

僕は誰かの声を聞きたくて、少しずつ歩き始めた。僕の他にも無事な人がいることを確かめたくて。そして何より、自分を助けてくれる、誰かの存在を求めて。

誰も見つからない。涙が何度もあふれてきた。それでも僕は、希望を捨てずに探し続けた。

その時。

「だれ……か……」

どこからか声が聞こえた。

「だれか……」

僕はさがるように、声のする方へ近づいていった。

もしかしたら助けを呼んでくれるかもしれない。そうでなくても、誰かがいれば、心強い――。

でも僕のそんな甘い考えは、すぐに打ち砕かれる。

「たすけて……」

声のする先には、人が倒れていた。成人女性と、その腕に包まれた女の子。どうやら、母と娘のようだった。母親はぐったりしているけど、息がある。そして女の子のほうは、その母親を見ながら、泣いていた。

僕はその二人のほうへとさらに近づいていく。でもその途中で、足を止める。下半身が見えなかった。

瓦礫の下敷きになっている。女の子は何度も抜けようともがいているが、びくともしない。

そして女の子が動いたとき、真っ赤な血が、床に広がっていった。

それは、人が死のうとしている瞬間だった。

女の子と、目が合った。

「だれ……か……たすけて……」

「……うあああああああああああ！」

気が付けば僕は、逃げていた。これ以上、それを見ているのが耐えられなかった。

逃げて、逃げ続けて、我に返った時にはもう、その声は聞こえなくなっていた。

そして僕は、その場に、泣き崩れた。

その時僕は、ヒーローなんてこの世にいないのだと、知った。

置いてきたカバンを取りに行こうとして、部屋に戻ると、そこには果実だけがあった。果実は僕の存在を認めると、すぐにそっぽを向く。僕はその態度に、釈然としない気分を抱きつつも、聞いた。

「咲々は？」

「は？ 帰ったに決まってるでしょ」

「まあ、それもそうか」

もうずいぶんと遅い。普段なら活動を切り上げていてもおかしくない時間だ。ちなみに四華とは、現場近くで別れた。家があっちの方面にあるらしい。水無前もたぶん、もう帰ったのだろう。それにしても、咲々も薄情な奴だ。果実ひとり置いていくなんて。

「あ、そういえば」

僕はデジカメを取り出す。

「果実、これ誰の知ってるか？」

「あ、水無前先輩の……」

「ふーん」

それなら別に、慎重に取り扱う必要もない。それを長机の上に、乱雑に置いた。

「じゃあ僕は帰るから、お前も気を付けて帰れよ」

果実に背を向ける。

「待って……」

でも、果実に声をかけられて、僕は止まっていた。

「ん？」

振り返ってみる。果実は俯いて、何かを言いにくそうにしていた。でもやがて、彼女は顔を上げて、僕にこう言った。

「あのさ……一緒に、帰ってくれない？」

――。

帰路に行く間も、僕はずっと考えていた。なぜ、果実が突然こんなことを言い出したのかを。

僕は、果実の頼みを受け入れていた。なぜなら僕は、家族との距離感を図りかねているだけで、自らすすんで険悪な関係になりたい訳ではないからだ。

果実は僕の横で、小さくなつてついてきていた。いや、そもそも体格が僕よりも一回りも二回りも小さい。今まで肩を並べて歩いたことなんてないので分からなかったが、果実は僕の思っていたよりもずっと、小さくて弱々しく見えた。

そもそもなんで、こいつは咲々と帰らなかつたのだろう。そういう考えに至つてから、気が付いた。先に咲々を誘わないはずがないのだ。だとしたら、こんな状況に陥っているのは、咲々の差し金か？ あいつ、一体何を考えている？

僕は果実を見た。こいつなら何か知っているのだろうか。でも、だからといってストリートに問うことはできない。本当に何かを企んでいるとしたら、果実もまた、共犯である可能性が高いからだ。

だから、僕は取り敢えず探りを入れてみることにした。

「こうやって二人で家に帰るのって、初めてだよな」

普段の果実なら、噛み付いてくるか、無視してくるか。でも今日の果実は、様子が変わっていた。

果実は、少し怯えたような目で僕を見ると、ポツリと、こう言った。

「あのさ……ストーカーされてるみたいなんだ、私」

「……ストーカー？」

「うん……」

それは予想外の答えだった。一体誰が……？ 一瞬、殺人犯のことが脳裏をよぎるが、僕はすぐにそれを振り払った。

「誰かにつけられてるのか？」

すると果実は顔を左右に振り、自分のカバンからスマホを取り出した。

「ケータイ……変な電話がかかってくるの」

僕に着信履歴を見せてくる。そこにはびっしりと、非通知が並んでいた。

「いつからなんだ？」

「三日くらい前から……最初はただの悪戯かと思っただけけど……でも、段々しくつくなってきた……」

果実はまだどしく続ける。

「電話に出ても、何を言っても返事は返ってこなくて……でもその代わり、コンコン……って……」

その時、果実の携帯電話が、鳴った。

果実の身体が、恐怖でビクンと跳ねる。僕は果実からスマホを取って、自分の耳に当てた。

「誰だ……」

返事はない。代わりにスピーカーの奥から聞こえてくる。

コン、コン、コン。

何かを三回だけ叩く音。

そしてその直後、通話は一方的に絶たれた。

果実が、懇願するように、僕に訴えてくる。

「ねえ……助けてよ……」

その時、果実の顔が、八年前の少女の姿と被って見えた気がした。

子供の頃の僕は、果実との仲は悪くなかった。いや、むしろ良かったと言って良い。いつも咲々を交えた三人で遊んでいた。僕は果実のことを大切に思っていたし、きっと果実のほうもそう思ってくれていたのだと思う。

でも、だからこそ、真実を知った時、僕は許せなかった。過去も、そして自分の抱えている気持ちもすべて、偽りのものだと否定された気がして。

僕は家を出ていた。家を出ることは、ある一人を除いて、誰にも言わなかった。誰も信じられなかった。誰かと言葉を交わすほど、自分のメッキが剥がれていくのではないかという、不安があった。

どこでもいい。遠くへ行きたかった。

いちばん遠くまで行ける切符を買った。偽りの自分を感じさせないくらい遠い場所なら、どこでもよかった。

電車に揺られている間、僕は、果実のことを考えていた。僕は果実のことを、ずっと大切に思っていたのに。それが、すべてを裏切られた気がして、その感情をどこへ追いやればいいのか、分からなかった。

考えれば考えるほど頭の中が纏らなくなつて、それでも考え続けて。やがて僕は思考停止に陥つて。

そしてその時、事故は起きた。

――。

必死に助けを求め続けて、気付けば僕は救助されていた。事故の瞬間が、何度も何度でも頭の中で繰り返されて、僕はそれを振り払いたくて、膝を抱えて、小さくうずくまった。

そうし続けて、何時間が過ぎた頃だったろうか。どこからか、聞き覚えのある声が聞こえた。僕は耳を澄ませた。

それは、父親と母親、そして妹だった。

三人は僕の名前を呼んでいた。やがて、僕の姿を見付け、こちらへと近づいてくる。

彼らは、本気で僕のことを心配しているように見えた。でも、それが余計に僕を混乱させた。

三人の中で真っ先に、果実が駆けだした。そして、僕の身体を抱きしめる。僕は呆然と彼女を見つめていた。果実はただずっと、泣き続けていた。

僕は果実に尋ねた。

「なんで、泣いてるの？」

果実は尚も泣き続けながら、嗚咽の入り混じった声で言った。

「だって……果実は……おにちゃんのこと、すぎだから」

僕は、果実にそれ以上の声を掛けなかった。そしてそれ以来、僕は、果実を避けるようになった。

放課後のチャイムが鳴つたのと同時に、一斉に疲れが噴出してきて、僕は力なく机に突っ伏した。

「はあ……」

「お疲れだねえ、なんかあった？」

隣の席の、咲々が、僕とは対照的に明るい声で尋ねてくる。



よく言うよ、お前が差し向けてきたくせに、と僕は心の中で小さく悪態をついた。

「別に……」

あれから僕は、果実と共に行動する機会が増えた。行きと帰りも最近は一緒だ。ストーリーに諦めさせるためだとか、いろいろな理屈をこねていたが、要するに、心細いのだろう。で、一番身近な僕に助けを求めたのだ。

ちなみに、果実にそう助言をしたのは、やっぱり咲々らしかった。隣でいやらしく笑みを浮かべているのが、憎たらしい。

「そう？ だったら別にいいけど。それよりさ、一緒に部室行こうよ。今日は来るんでしょ、部活」

「あー、そうだな」

そういえばここ何日かは果実に付きつきりだったお蔭で、ろくに活動出来ていなかった。例の事件の調査も、投げっぱなしになったままだ。

「行ってみるか……」

「よし、そうこなくっちゃ！ ほら、早く早く！」

「ん……」

咲々に急かされながら、僕は重い体を持ち上げつつ、教室を後にした。

最後の事件から一週間くらい経っていたが、未だに新たな事件は起こっていない。生徒たちの大半は、もう事件のことなど忘れて、普段通りの日常に戻っている。

もう事件は起こらないのだろうか、なんとなく思った。第一の事件と第二の事件のインターバルが約三日という短さだったから、まるで期間が開いたような感覚に陥っているだけなのかもしれない。

事件が起こらないのならば、それに越したことはないはずなのだが、僕にはそれが、どうも引つかなかった。それに、犯人は今も逮捕されていない。犯人が捕まるまでは、この事件は終わったとは言えないはずだ。

部室には、先に水無前が来ていた。

「どもっす」

水無前は、軽快に挨拶をし、僕らもそれに返す。

「そういえば、俺のカメラになんか知らない写真が写ってたんですけど、何か知ってますか？」

水無前は自分のデジカメを持ち上げてみせた。

「ああ、ごめん、それ僕が使ったんだ」

「ちよ、勝手に使わないでくださいよお！ 怪奇現象かと思ってビクビクしてたんですから」

「でも、その辺に置いておくのが悪いんだろ？」

「そうっすけど、せめて一言くらい声かけてくださいよ……」

すると、水無前が不満を漏らしている横で、咲々が首を突っ込んでくる。

「ねえ、写真ってどんなの？」

「第二の事件の次の日、僕と四華で現場を見に行ってきたんだ。その時に撮った現場の写真だよ」

「でも、その割には大したもの写ってなかったっすよ？」

「まあ、警察が殆ど調べた後だからね。それでも、まだ何か見逃しがあるかもしれないと思って、撮ってきたんだ。でもそのあと色々あったせいで、まだちゃんと見てない」

「じゃあ、今見てみようよ」

そう言っつて、咲々は、部室に置いてあるパソコンのスイッチを押す。

「そうだな。水無前、パソコンにカメラのデータを入れてくれ」

「了解っす」

水無前は、デジカメからSDカードを抜きだして、パソコンに差し込んだ。表示された画面から、例の現場の画像だけを抜き出し、パソコンのハードディスクへと移動させていく。

それは全部で十五枚だった。

「確かに、普通の道を写しているようにしか見えないね……」

「でもここで、殺人が起こったのは事実だ」

そうは言っつても、出てくるのはなんの面白味もない写真ばかり。実際に行ってきた僕ですら、本当に殺人現場で撮られたものなのか、疑問に思えてくる。結局、無駄に骨を折っただけなのかもしれない。あの現場に行ったのは。

そう思い始めていた時、突然、咲々があつと声を上げた。

「ねえ、の写真、何か写ってない？」

「なんだって？」

僕はすぐにパソコンに視線を戻した。

「どこに」

「ほら、ここ」

咲々はパソコンのモニターの、ある一点を指さす。

それは一見、ただの電柱のように見えたが、確かに何か模様が刻まれているように見える。

僕は、その画像を画面上で拡大した。そこには。

「六芒星……」

六芒星のマークが、はつきりと、写っていた。

あれだけ、現場で探したのに。どれだけ探しても見つかることはできなかったのに。僕が自分で撮影した写真には、間違いなく、六芒星のマークが映り込んでいた。まさか見逃してしまうなんて。でも、なんだか納得がいかなかった。頭の中に、霧がかかったような、そんな感覚。

でも、この件は取り敢えず、今は置いておくしかない。

その後、果実と四華も、部室に顔を出していた。

僕はこれまでの事件を整理してみる。

けど正直、お手上げだった。僕らはまだ何一つとして、犯人に迫り着いていない。僕自身は、犯人が学校の関係者だつて断じているけど、それだつて本当は定かではないのだ。

二つの事件は、この学校の生徒であることと、その殺害方法以外に、共通点はない。

これ以上考え込んでいても埒が明かないことは、明らかだった。だったら。

「これから、聞き込みに行こうと思う」

僕は、部員たちに、そう言った。

咲々は少し戸惑った様子で、僕に問う。

「聞き込みってどこに？」

手掛かりは何もない。だったら、一から洗い直してみるしかない。

「第一の事件で、警察の事情聴取を受けていた、三人だ」

彼らなら、一つ目の事件について何かを知っているかもしれない。警察から何らかの情報を聞いている可能性もある。とにかく今はどんな小さな情報でも、風潰しにしていくしかなかった。

ただし、今は放課後。帰宅部の師走崎聖夜は、多分もう学校にはいないだろう。そしてそれは、同じ帰宅部である指南川心麻も同じ。ということとは、残ったのは、あと一人。

「僕は今から遁走輪に会いに、吹奏楽部に行く」

すると咲々が、僕の声に反応して、言った。

「ねえ、私も付いて行っていいかな？」

「いいけど、邪魔するなよ」

「うん」

「他の三人はどうする？」

三人の中で最初に答えたのは、水無前だった。

「悪いっすけど、俺は、パスで。もうすぐバイトに行かなくちゃいけないんで」

「そうか、引きとめて悪かった。四華は？」

「私も……今日はアニマップに行くから……」

「じゃあとりあえず、ここで解散にするか」

席を立つ水無前と、それに続く四華、それを眺めながら、僕は残った一人に声をかける。

「果実も、帰りがかったら帰っていいぞ」

「……行く」

果実はくぐもつた声で言う。

「ん？」

聞き取れなくて、堪らず聞き返す。

「行くなって言ってるでしょ！ 馬鹿じゃないの！」

なんでそんなに怒る必要がある。

「果実ちゃん、心細いんだよね？」

なるほど。

果実は咲々に対し、「違うし」と反論するものの、その声にはもうさつきまでの

勢いはなかった。

――

音楽室の前で遁走輪を待っていると、迷惑そうな表情を顔に張り付けた女子が、

一人出てきた。

「あの、なんですか？ 練習の途中だったんですけれど」

「安楽醬について、話を聞かせてほしいんですけど」

「ああ、それね……」

露骨に嫌な顔をした。たぶんこれまで何回も聞かれてきたのだろう。

「手短にお願ひできますか」

「ああ、分かった。それで、さっそくなんだけど、安楽醬との関係は」

「別に、ただのクラスメイトですけど」

「殺された理由って分かる？」

「知りません」

「なるほど。ちなみに、去年クラスで財布の盗難騒ぎがあったみたいだけど、安楽が取ったって証言したのは君らしいね。それは本当？」

「そこまで聞くと、遁走は下唇を噛んだ。」

「安楽が死んだ話でしょ？ それ事件に関係ありますか？」

「いや、ちよつと気になって。で、本当？」

「……そうですけど」

「じゃあ財布を見たってのは？」

「……何が言いたいんですか？ 用がないなら、もう戻りますけど——」

「——輪——、なんか呼ばれてるよ」

その時、音楽室の奥の方から声がした。

「すみませんが、呼ばれてるみたいなので、私はこれで」

そして、そのまま音楽室に戻っていった。これ以上は聞けそうにないな。といつても正直、何か知つているとも思えなかつたけど。

「すごいねー、なんか刑事さんみたいだったよ」

咲々が、感心したみたいに言う。

「別に、そんなじゃないよ、結局大したこと聞けなかつたし」

音楽室の扉はまだ開いていて、中のやり取りが見える。遁走を呼んだ人物は校舎の外にいるらしく、遁走は身を乗り出して窓越しに話している。

今回はあまり情報が掴めなかつた。他の二人には後日聞き出すとして、今日はもう出直したほうが良いだろう。でも正直、これ以上何かを聞き出すことができるとは思えなかつた。

「何か別の方法を考えた方がいいかもな」

「ねえ……」

不意に果実が僕の袖を引っ張った。

「どうした？」

「私のスマホ知らない？」

スマホ？

「どこにも見つからなくて」

「部屋に置いてきたんじゃないのか？」

「うーん……」

果実は妙に煮え切らない様子だった。

「分かった、とにかく、一旦部屋に戻って見よう」

「うん……」

そして僕らが踵を返したその時。

音楽室で悲鳴が起こった。

慌てて僕は、振り返る。

音楽室の中の吹奏楽部員と思われる生徒たちは、みんな窓の外を見下ろしていた。でもそのなかに、遁走輪の姿はない。

僕は咄嗟に、階段を駆け下りていた。

「ちよつと、高——」

咲々たちの制止に耳を傾けている余裕は、僕にはなかつた。上履きも履き替えないまま、外に出る。

でもそれは、目を覆いたくなるような光景だった。

そこにあつたのは、首筋に深々とナイフが刺さった死体。それは先ほどまで、遁走輪だったものだ。ナイフにはテグスのようなものが絡まつていた。

そして、見覚えのある、果実のスマホ。

ひび割れたそれは、遁走の死体の前で、ひとりでに振動を続けていた。

遁走輪は、首にナイフが刺さった衝撃で、落下した。それはつまり、ナイフは遁走の頭上から落ちてきたということになる。ナイフの柄には、テグスが絡みつ

いていた。ということは、犯人は屋上のフェンスにナイフを括り付けていたのだろう。だが、それにはある疑問が残る。

犯人はどうやって、正確に首筋を狙うことができたのだろう。

事件が起こった後、僕は取り乱した果実を支えながら、部屋に戻った。

果実の呼吸は、まだ落ち着かない。でも当然だ。目の前で人が死んで、しかもその死体のすぐそばに、失くした自分のスマホが落ちていたのだ。それに果実はここ最近ストーカー被害にもあつていたのだ。どうかしない方がおかしい。

あのスマホも、事件の犯人の仕業である可能性が高い。でもそうだとしたら、いつ、それを持ち出した？

僕らのことはいつでも殺せるのだ、という犯人の脅しのような気がして仕方がなかつた。

でも、今はそんなことよりも、果実のことを落ち着かせなければ。

「咲々」

僕は部屋に着いてからずっと果実に声をかけていた、咲々に言った。

「僕はこれから果実を連れて帰る。咲々どうする？」

「うん、帰る。でも、ちよつと忘れ物取りに行くから、先に帰ってて」

「分かった。気を付けるよ」

「うん」

咲々が教室のほうへ行くのを確認してから、僕は果実の肩を抱いた。

「ほら、立てるか」

こくりと頷くのを確認して、立ち上がらせた。

こんなにも果実と近くにいるのは、いつ振りだろう、とふと思った。でもそれが、こんな訳の分からない事件のせいだなんて、一体どんな皮肉だろう。

僕はそのまま果実を抱えながら、学校を出た。

電車の中には幸いにも、人はあまりいなかった。開いている席に、果実を座らせる。

僕は視線を逸らして、流れる景色を眺めた。そこには第一の事件が起きた町、親善町がある。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。最初は、ただの好奇心のようなものでしかなかった。

まだヒーローになりたいのかという、咲々の言葉が、蘇る。

僕は所詮、ヒーローを気取りただけなのかもしれない。颯爽と登場して、華麗に事件を解決する。でもそんなこと、夢物語に過ぎないことくらい分かっていた。事実、下手に首を突っ込んでしまった僕らは、ここまで追い詰められてしまっている。

「ねえ」

果実が僕に話しかけてきた。目はうつろで、でもそれは僕を捉えている。

「なんだ」

「今まで言えなかったこと、言ってもいいかな」

「ああ」

「私、ずつと謝りたかったんだ。あんな態度撮っててゴメンって。本当はずつと、仲直りしたかった」

僕は黙って、果実の言葉に耳を傾けていた。

「だからちよつと嬉しかった。ストーカーの話をした時、口ではいいいや言っていたけど、ちゃんと守ってくれたから。ねえ、知ってた？ ストーカーのこと相談してみようって言ったの、咲々ちゃんだったって」

「知ってたよ」

「そっか……」

きつと、咲々は、知っていたのだ。果実がどんな思いで日々を過ごしているのかを、僕にどんな思いを抱いているのかも。

「あのさ」

果実は、泣きそうになりながら、僕にこう問いかけた。

「また、昔みたいに、お兄ちゃんって呼んでもいいですか？」

「……うん」

僕が頷くと、果実は微笑んで、それから急に安心したのか、寝息を立て始めた。僕はそれを、電車が到着するまで見守っていた。

駅を出たら、家はもう目と鼻の先だった。果実を支えて、歩き続ける。その時、スマホが鳴った。僕はそれを取り出し、ディスプレイを見る。

表示されていたのは、咲々の名前だった。通話ボタンを押して耳に当てる。

でも、何も聞こえない。そのまま耳を澄ましてみる。するとスピーカー奥から、小さな音が聞こえた。

コン、コン、コン。

まさか、そんな――。

僕は何かの聞き間違いだと信じたくて、耳にスマホを当て続けた。でも等間隔に聞こえてくる、何かを三回叩く音。

だけどその音に混じって、僅かに、違う音が聞こえた。

電車が、すぐそばを通った音。そして、踏切の音。

「――行って！」

すぐ横で、果実が僕を睨んでいた。

「私はもう歩けるから。だから行って。咲々ちゃんのところへ」

「ああ」

場所はもう見当はついていて、付近に踏み切りは、一つしかない。そして僕は、走った。

思えば僕は、咲々といつも一緒だった。どこへ行くのも、何で遊ぶのも。ずっと一緒にいようって、二人で約束していたから。

思えば家を出ることを決めたあの日も、僕は咲々だけには話したのだ、そう決心をしたことを。咲々は駄々をこねたつけ。一緒に連れて行って。でも、その願いを聞き入れなくてよかったって思ってる。あの地獄に、巻き込まなくて済んだから。

高校に入学した時もそうだ。咲々は、僕に同じ部活に入ろうって言ってきた。咲々はわざわざ廃部寸前の、文芸部なんてのを選んだ。僕は咲々に何をする部活なのか尋ねた。そしたら、「うーんと、本を読む部活かな？」なんて言って。たぶん僕らには、目的なんて、必要なかったんだ。だって僕らはずっと、一緒だったから。

三つの事件。一見その事件は全てバラバラで、関連性がない。だけど一つだけ、すべての事件に関わっていた者たちがいる。僕は今まで、その可能性に見向きもしなかった。そんなはずがないと思っていたのだ。でも、今もつとも怪しいのは、ずっと目を背けていた、その可能性だ。

僕はそこに辿り着いた。親善町と加賀見町の境目に位置する踏切。暗闇の中、僕は一人の女の子の姿を探す。そして、

「咲々！」

踏切の手前で倒れている咲々の姿を見つけた。僕は急いで彼女に駆け寄る。外傷がないのと、呼吸をしているのを確認して、僕はほっと溜息を吐く。でも、これで終わった訳じゃない。犯人が、ここにいるはずなのだ。

僕は暗闇に向かって叫んだ。

「お前のことはもう分かっている。出て来いよ——四華！」

すると闇の中から、綿貫四華が、姿を現した。

「……よく分かりましたね」

四華は、まるで何も感じていないかのような無表情で、僕を見ていた。

「気付かれないかと思っただけ」

「……きつかけは、六芒星のマークだ」

第一の事件に残っていた、六芒星のマーク。

「僕はてっきりあれを、犯人の主張か何かと思っていたけど、実はそうじゃない。あれは、安楽醬に向けたものだった。そうだろう？」

四華の返事はない。それでも僕は続ける。「オンラインゲームのユグドラシルオンライン。お前もやってるって言ってたよな。お前はゲーム内チャットで、安楽をおびき寄せた。同じ学校だとか言って、親近感を持たせてな」

安楽はかなりのゲーマーとして、割と有名だったようだから、ゲーム内で特定するのは難しなかったのだろう。

「そして、お前は場所を指定するのに使ったんだ。ゲームのロゴに象られた、六芒星のマークを」

調べればすぐにわかるはずだったのに、僕は気付かなかった。これが分かっていたら、もっと早く犯人に辿り着けたかもしれない。

「そして、第二の事件。これは、帰宅途中の生徒を襲った。だからお前は中学時代テニスで有名だった九重来を狙ったんだ。顔も知っていたし、帰り道が途中で一緒に帰宅ルートも分かっていた。だから待ち伏せできたんだ」

「ただ一つ問題が発生した。」

「僕が第一の事件で、六芒星のマークに気付いたことを、知ったんだ。そして第二の事件にもあるはず、なんて言い出した」

そこで焦った四華は、カメラに収められていた写真を、別のものと差し替えた。六芒星の跡が写っている写真へと。

「そして、第三の事件」

これは今日、僕らの目の前で起こった事件だ。

「お前は屋上に、テグスでナイフを吊るして仕掛けた。そして果実のスマホを重りがわりにして、着信と共にナイフが落下するように仕向けたんだ」

「——でも」

ずっと黙っていた四華が、言った。

「じゃあどうしてあんなに寸分違わず首を狙えたんですか？」

「偶然だったからだ」

「……」

「もつと言えば、お前にとって、遁走輪は死んでも死ななくてもどっちでもよかったんだよ。僕らに対して、脅しとしての意味を果たせればね。死ななくても、首元を掠めさえすれば、十分騒ぎになるだろうしな」

そこまで言って、僕は一息置いた。いろんな思いが押し寄せてきた。でも、ついに堪え切れなくなつて、僕は言った。

「そして今度は、僕を殺すつもりだった」

そのために、咲々のスマホを使ってまで、僕をおびき寄せたのだ。

「いったい何のために、お前はこんなことしたんだよ！　なんでこんなに人を殺さなくちゃならなかったんだ！」

「……この顔、覚えてないですか？」

四華の言っていることが、よく分からなかった。

「お前、何言つて——」

「八年前、あなたが見殺しにしようとした、あの親子の顔を！」

その時、心の奥底に封印していた記憶が、蘇つてきた。

「まさか……」

「あの時あなたが見殺しにしなければ、お母さんは助かつてたはずなのに！　なんで、助けてくれなかったの！」

あの時の子が、目の前の四華だつていうのか？

「私はあなたに苦しみ味あわせたかった。だから、あなたの周りで、事件を起こし続けた」

そんな。じゃあ、事件を起こしたのは、ぜんぶ僕のせいだとも言うのか。

そして、四華は、懐からナイフを取り出した。

「あなたを殺せば、すべてが終わる」

ナイフは、その刃の切っ先に僕を捉えていた。そして、僕の身体を射抜かんと、迫りくる。

「ああああああ！」

でもナイフは、僕に届く寸前で、地面に転がつっていた。

「どうして……避けないんですか」

だって。

「お前は、咲々のことも、殺せなかったから」

僕が駆けつける前に、咲々を殺す余裕はいくらでもあった。でも四華は、殺さなかった。

「もうやめろ。お前にはもう人を殺して欲しくない」

だつてお前は。

「僕たちの仲間だから」

四華は膝をついて、泣き崩れた。僕はそのすすり泣く声を、ずっと聞いていた。

空を見た。

黒く染まった空が、僕らに涙を落とし始めていた。

「ねえ、起きなよ」

う……ん……

「ねえ、起きなつてば」

あれ……ここは……

「なに寝ぼけてんの、部室だよ、部室」

いつの間にか寝てたのか、僕。

「うなされてたけど、怖い夢でも見てた？」

ああ、確かに、怖い夢だったよ。

「ふーん」

そういえば、みんなは？

「みんな帰っちゃったよ、高が寝てるから」

この薄情者め。

「でもこうして、私は待つてあげてるでしょ」

うん、ありがとう。

「……」

夢の話をしてもいいかな。

「うん」

夢の中の僕は、咲々が、好きだったよ。

「なに、それ告白のつもり？」

いや、違うよ。ただ、今言わなかったら、永遠に言うタイミングが来ないよう

な、そんな気がしただけ。

「なにそれ、変なの」

そんなに変かな。

「変だよ、すごく変」

そっか。

「うん……」

咲々。

「なに？」

「うん」  
僕さ。  
ヒーローになれたかな。

一  
円

星  
井  
靄



駅頭の雑踏は対向者を思い遣るだけの心を有たず、せかせかと、まるで歩度を緩めた途端、流れ去る斯界の片隅に取り残されてしまふのだからとでも言いたげな、凍み入るように風雑じりの雪が吹き付けける冬の窓のような眼を固くしたまま、泥を握って作つたようなその表情を恥ずかしいと思つたこともないだろう、毫も感情を表に綻ばせることなく、ましてや行き違ふ群衆との交情など知つたことかと、薄暗い駅の出入口を通り過ぎていく。もう二度とここに来ることなどない、こんな渴ききつた憂世とはおさらばだ、愉しい別れだ、懐かしき我が親しき風景よ、そう自らに言い聞かせているのか、ぶつぶつと何か呟きながら、丸めた紙屑の様な服で着飾つた人人は、自分独り極楽往生を決めたのだとばかりに、列ぶ墓石の様な改札を、足早に行き交つている。

ちょうど谷合いに設えられた停車場は、丘の上と下と、両方に改札が置かれていたのだが、低地の方の改札に展開される、部屋の一隅にわだかまる綿埃の様に退屈なこの景物を、たつた今、やつとのことで改札を出てきた老人、尾張季弘はとつと見飽きていたし、観れば観るほどに己の中の厭世家を肥え太らせることにも嫌気が射していた。

季弘は、自動改札に埋め込まれた画面に表示される、ICカードの残高が切り好く零円になつたのを認めると、溜息を吐いた。いや、厳密には吐きかけた、と言ふべきだろう。季弘が嘆息しようと歩調をゆつくりさせた途端に、後ろから来た四十絡みの骨張つた女に背中を肘で小突かれ、この哀れな老人はガタのきた膝に鞭を入れ改札を跳び出さなければならなくなり、文字通り、息吐く暇も無く、墓地に出没する幽霊の如く、恨めしそうに肘を曲げながら、改札の脇に立ち竦むこととなつたのだ。

佇立したまま、落ち着く暇も与えられず、老人はこの先に待ち受けている生活のことを考えなくてはならなかつた。もはや交通費は使い果たした。それではその他のお金は、と云えば、もう財布にはほとんど入つていなかった。ICカードの入つた、黒い、安っぽい穴の空いた財布を手につつたまま、季弘は立つていた。年金は借金の返済と公共料金の支払いとに一切が消えてしまふだろうし、他に収入など有り得なかつた。それに、矜持ばかりを後生大事に抱えて生きてきたこの男に、社会保障の綱に身を任せて、落伍者の不名誉を戴くことなど出来るはずもなかつた。

老人の絶望が目頭を熱くし、喉を震わせようとしている時だつた。手の中から財布が失くなつていくことに気付いた。泥棒、泥棒。咄嗟に叫ぼうとしたが、声が出なかつた。悲しい、獣じみた老人の呻きを気に留める人は居なかつた。改札

脇にある駅員の駐在している窓口にはシャッターが下りていた。老人はこれ以上血圧を上げるわけにもいかなかつたので、とほとほと歩き始めた、真昼だということに薄暗い東口改札を脱げるために。

なんということだ、残り少ない生活の手立てだつたのに、あれがあれば少なくとも一週間は暮らせたはずだ。こんなことになるのなら、職安など行かなければ好かつたのだ、今や職業安定所内で飲んでいた伍珈琲の味はさながら甘露と想起され、暖房の効いた暖かな室内、柔らかな革のソファ、さり気なく置かれた観葉植物の若葉、清潔な白さを湛えたレースのカーテン、つややつとワックスの照る床、職を求める人人のさやめきはあたかも天上の楽の音の如き調となつて聞こえてくるようだつたし、番号札の番号を無感動に呼び上げる職員共の声は中性と無量の天使の口許を伝う囁きだつたと思われ、結局見付からなかつた好適の職は幻などではなく生の為に課された一種の試練だつたはずだ。それがどうだろう、無一文と成り果て、路頭を彷徨い歩く、惨めつたらしい、誰かに同情を寄せられることも無い、朽ちて枯れ果てるのを待つ、孤独な老人だ。出来ることなら、交差点を吹き抜ける砂埃か、バスの吐き出す排気の煙となつて消えてしまひたかつた。ビルに遮られた向こうの空に、天高く太陽が輝いていることすら信じられなかつた。まだ路地裏には灰白く残雪のかげが見えた。もう二度と溶けることがないのではないだろうか、きつとそうだ、おれの財布は、それに、おれの人生は、尾張季弘老人は駅から歩いて十分弱のアパートに住んでいた。谷間にある駅の改札を出て、一度長い坂を通る必要があつた。足取りは重く、坂の途中で何度も立ち止まり、深く深く溜息を吐いた。その度ごとに、あの意地の悪い女の感触が老人を責め苛むのであつた。そうして、老人は呵責を感じて歩みを再開するのだつた。それを観る通行人は、きつと、老人性の、有りがちな、体力の衰えとちよつとした身体の不調から来る状態の悪化に因つて、この老人は独特の動作を繰り返すのだらうと思つたに違ひなかつた。蔑んだような視線と馬鹿にするような口元の痙攣を、老人は見出した。憐れむがいいさ、所詮は長くない人生の残余だ、もはや死期がちよつとばかりし歩度を早めて近付いて来ようが構ひやしな、どうだ、これだけ具合が悪かるうが、おれは坂を上り切つた、陽は高く出ているではないか。季弘は息を切らしながらも、その切れ切れの呼吸の合間にそう思つた。

老人の住むアパートは陽当りの悪い、それに設備も賞められたものではない、安普請の木造のアパートだった。老人はアパートに着くなり、貯金通帳を探した。出し忘れが重なり、溜まりに溜まったゴミ袋の山を押し分け、脱ぎ散らかしたのか干し忘れたのか判らない衣類か洗濯物を投げ、通帳を探した。確か通帳にまだ金が残っていたはずだ。おれはまだこのアパートに住み暮らし、生活を営み、そうやって生き延びるのだ、住むとは生き延びることだ、慥かそうだったはずだ。積み重なった読み止しの書物を蹴飛ばし、生命を繋ぎ止めるための覚書を探し索めた。老人が部屋を漁る度に埃が舞い上がり、やがて落ちていった。

十分も部屋の中を掻き回しただろうか。遂に、炊飯器の中から通帳は見つかった。老人が最後に米を炊いたのは、もう思い出せない程の往昔だ、それは釜の中で蜘蛛の巣の様な糸の塊を作っている米の澱粉質から推知された。なぜ炊飯器の中に通帳が蔵されていたのか、全く見当が付かなかった。大方通帳を持って出掛けて、帰って来て、慌てていたのか何の気無しに蓋の開けっ放しになった澱粉質の巢の中へ投げ込んだのだろう。

老人は興奮の余り、今度は愉快さを伴って、息を切らしていた。金だ、ようやく生活の為の金が見つかったのだ。自然と笑みがこぼれてくる。老人は恭しく通帳を押し戴くと、それからや々と通帳を開いた。一頁目、まだ或る程度の財産があつて、二頁目、この辺りからだるか、引出す回数と額が増えてくる、三頁目、もう目を充てるのもうんざりだ、四頁目、だれにだって思い出さたくないことはある、五頁目、下段の方が空白になっているのがちらりと見えた。老人はそこで頁をめくる手を止め、そして、ゆつくりと残高を確認する為、頁を大きく見開いた。

老人は小さな悲鳴を上げた——一円、僅かに一円だったのだ、通帳に記入された黒い文字列はたった一桁を、それも最小の自然数を書き留めているに過ぎなかった。老人の悲鳴は部屋の隅に到達して、たちまち掻き消え、はじめからそうあつたのだと錯覚してしまいそうになる程に、やや青味がかつた灰色の綿埃の中にすべて吸収された。老人の魂は糸屑と何ら変わらなかつたのだ。今までもそうだったのだ、それがこの機会によく目立ち始めただけだった、黴の生えた、陽当りの悪い、粗造のアパートの、それも一番奥の薄暗い一室のすみっこにこうして取められて隠されているのが詭向きだったのだ。

季弘はゴミ袋の中へ倒れ込んだ。夢だ、夢であつてくれ、悪夢なのだ、白昼夢に魔されているのだ。老人性の鳴咽がプラスチックの弁当箱の幾食分もの塊の中でざわめていた、己が運命を、ちっぽけな自己が宏壮なる歴運の中で占め得る地

位を認めたかのように。鼻を刺戟する臭気と穢らしい埃だけが季弘の門出を祝う妖精のようだった。

老人は通帳に記帳された最後の一行を濡れた眸で瞞めていた。そして、上に行けば行くほど増えていく残高を見て笑つた。それからくたびれた老人の思考は、或る一点に集注した、利子だ。預金には利子が付くのだ。老人は痙攣じみた笑い止めると、また最後の一行をじっくりと見た。この一円にも利子が付くはずだ。例えばどうだろう、この口座の利率が三パーセントだとして、一年後には幾らだろう。老人はものぐさにゴミ袋の中からダイレクトメールの裏面が真白になっているものを引つ張りだし、床に散らばつた物の中からは鉛筆を取り上げた。計算する程のことでもなかつたと老人は大きく嘆息した。一円三銭だった。しかし、これが百年後だとして、複利で幾らになるだろうか。季弘は鉛筆の先を舂め、今までしたことなかつた複利計算に取り組もうとしたが、方法が判らず、丹念に次次に出てくる解答に〇・〇三を掛けては最初の項に足していった。一円六銭、一円九銭、一円十二銭……十九円……三六九円……七、〇九九円……一三六、四二四円……二、六二一、八七九円……六、八七四、二四〇、二三一、一六九円……素晴らしい、夢のようだ、千年立てばこの一円が六兆八千億円になるのだ。六兆八千億円あれば、何が買えるだろうか、家を、そうだ、まずは家を買うだろう、高級住宅街に我が千年の殷盛を記念する様な巨大で豪華な大邸宅を建てるのだ、部屋数は数え切れないだけの、何れも瀟洒を極めた最高級の素材と調度品を、これも山程飾り立てて、それから若い女を雇うのだ、これは三六五人は要るだろうな、いや閏年も考慮に入れば、面倒だ、五〇〇人も雇えば足りるだろう、幾ら雇おうがおれには素晴らしき一円があるのだ、尽きせぬ金の源泉がある、家を建てたら、旅行にでも行こうか、何処に、西欧は、いや、世界一周だ、つまらんつまらん、俺には一円があるのだ、月か火星か、そうだ、もっと金を殖やして惑星を買上げればよかるう……、二千年辛抱すれば……四七、二五五、一七五、七五五、八二六、九〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇……老人は兆を数えた辺りで指を止めた、ケイだったかな、それともキョウだったか、キイではないだろう。興奮して跳び上がりゴミの山を掻き分け、日焼けして黒っぽくなつた国語辞典を引き揚げた。そして、巻末に付されていた数の単位表を確認して、二千年後に待ち受けている己が財産の正式な呼称を識つた。四百七十二稜五千五百七十七京八千二百六十九兆九千億円。もはや老人の理解の範疇を大きく超えていた。しかし、老人の知性は熱に浮かされたように昂奮して止まなかつた、かつて無かつた数字との出会いがそうさせたのだ。四百七十二稜という未知の金額は冷ややかな



頂上

星井靄

窓の外は九月の風光に彩られ、これから色付き始めるだろう叢木の幹が垂直に立ち並ぶ、男は淡く赤や黄の彩色を施された風景を、微に入り細に亘つて、鮮やかさを保ったままに分析してみたくなる誘惑に駆られていた。九月は分析の、そして分岐の季節だ。男は大型バスのゆつたりした座席に深く座り込んだまま、山頂を目指して走り続けるバスの走行音は心地よく、次第に眠気の強まるのを感じていた。

見渡す限りの山岳風景の偉容が、男に欠伸を噛み殺させ、窓外に飛ぶ鳥の姿に注目させた。タカかワシだろうか、男は顎を上向かせた姿勢で外を眺めていた。木木の揺れに風が強くなってきたのを感じ、今すぐにも窓を開け、その万籟を身体いっぱい受けたくなるのだったが、残念ながら窓は嵌め殺しになっていた。男は手の甲で軽やかに硝子を叩いた。

バスは頂上に向かって走り続けている。席はほぼ満座だった。すべて旅行会社を通じた観光客だ。ほとんどが初老の夫婦であり、男が独りというのはまず見受けられなかった。バスの待ち受ける駐車場に、遅刻寸前で現れ、大慌てで走り寄ったのはもう四時間も前のことだ。男の目的はこの観光客達の目的と同様であり、山奥の寡村で催される祭の見学にあつた。藁と竹とで造られた巨大な蛇を担いで山路を歩くというものであり、その趣意は五穀豊穡という大雑把と云えば大雑把な風儀であつた。ただ、山頂でその蛇の模型を盛大に焚き上げる様子は、佳絶の光景と紹介されており、男もそれ見たさでの申し込みであつた。

車内は穏やかな午後の光で満たされ、話し声も疎らに、あつても気を遣つての私やかなものであり、ただバスの駆動する音だけが虚ろに響いていた。男は狭い対向車線に視線を落としていた。バスの二階という目の高さからは走り去る車内の様相が好く窺えるのだった。

男がぼんやりとしたまま路側帯を示す分離線を目でなぞっていると、一台の軽自動車は猛烈な勢いで通過していった。不意に振り返った、危ないな、事故でも起こしたら、白い車は男の窓からはもうとつとく消え去つていた。男は軽く、呆れたように溜息を吐き、足を組み替えた。一瞬だけ見えた運転手の顔は、若い男の顔だったが、口も眼も大きく開いており、まるで何かから逃げているような、そんな表情だった。まさか本当に事故でも起こしたのだろうか。

男が渴きを癒そうと鞆の中に入れておいたペットボトルを取り出した時だった、たちまち黒い車が視界の端を飛んで行った。自家用車で来なくて正解だった。山には無法者が多すぎるようだ。男は水を口に含みながら思った。遠くの席の方からも、物騒だとか迷惑だとか何とか云う声が多く聞こえてきた。男は心の中で呟

いた、同感だ、近頃の若い奴らというのは、しかしすぐにその考えを別の考えで上書きした、ああ、せつかくの小旅行だ、この山並みを見ておこななくては、せつかく金を払つて来てるんだ。

二十分は経つただろうか、口を付けたペットボトルはもうほとんど空に近かつた。暑いのだ。車内はまだ初秋だというのに暖房を効かせていた。運転手に云つて、止めてもらおうか。男は車内を見回した、他に暑がつている客があればなあ。たつた独りで苦情を云うのには抵抗を感じていたのだ。お蔭で水が空だ。何処から仄かに、ちよつと暑いな、と声がした。皆同じ気持ちなのだ。誰かが言い出すのを待っている、そしてそのことを頓馬な奴にでも汲み取れる様にわざわざ声に出して聞かせているのに違いない。男は立ち上がるうとした。だが、それを制するかのうに、窓も破れればかりの叫び声が車内に響き渡つた。

事故よ、事故。騒然とするバスの中で、男はやや腰を浮かしたままの状態であつた、今はそれどころではないのだ。男は事故の現場をその眼で確かめようとした。しかし、窓の外に見えたのはただ枯れつつある雑木林の姿だけだった、もうかれこれ五時間以上は見ている姿だ。山の頂はまだ遠いのだろうか。見ぬ間に通り過ぎていった一大事に馳せる思いも無く、男は長袖のシャツを捲つた。乗客のどよめきは未だ収まらず、隠す様な声調で口口に事故の様子を話し合っているらしいのだったが、男の耳に届くまでに騒音に掻き消されてしまふのだった。事故と云うのは、きつと交通事故に違いないだろう、しかし、車対車なのか、ひよつとすると対人事故なのかもしれない、あれだけの叫び声だ、きつとそうだ、だが、この山奥で、歩行者などいるはずもない、だとすればやはり車同士の事故だろう、騒ぎ方からして事故なのだ、トラックと軽自動車が正面衝突でもしたのだろうか、辺り一帯に車の破片が飛び散り、破片の隙間を、或いはその上を蔽う様に血が流れていく、車に挟まって仆れた運転手と近寄つて呼吸を確かめようとする相手方、伸びる腕は青白くアスファルトの熱を少しでも吸い上げようとしているようだ、横様に通り過ぎる観光バス、見上げるように、救けでも希めるように観光客を噴める運転手の顔は、まるで走り去る覗き魔の群れを半ば責める様でもある、お前達にも罪はあるぞ、と。

男はいつの間にか眠つていた。それに気付かせたのはけたたましい警笛の音だった。甲高いその音は連続して鳴らされた。男は通路の方へ首を伸ばして、何が起きているのか確かめようとした。道はもう山の麓を越えて、車体は少し傾斜していた、車一台分の幅しかない頂上へ向けて渦を巻く一本道になつていた。またぞろ事故だろうか、男は長時間の車中行に退屈を感じていることを自覚していた。

車内は声一つとして上がらない。何のことはない、ただ標識が設置されていて、指示する通りに警笛を鳴らし続けなくてははいけなかったのである。男は背凭れに勢いなく落ちた。

頂上を目指して上り続ける道には、錆びているガードレールのその錆色も見えなくなる程に、霧が立ち込めてきた。男は窓外の絶景をすずるに眺め遣る楽しみすら奪われてうんざりしていた。刺り忘れた顎の髭を指の腹で撫でながら、前方の座席の背に設けられたフックだの、ビニール袋の入った網だの、ペットボトルを置いたための部品だのをじつと見るほか無かった。たまに現れる車が行き交うための幅広の地帯を数えるのも十を越したところで止めてしまった。道はまだ長く長く続くようだった。ひよつとすると一生続くのでは無いだろうかと思われてきた。好かつたことと云えば、暖房を止めさせなかつたことくらいだ、霧が出てからというものの肌寒かつた。男はもう何もかもうんざりしていた、何も起きやしないこの持続に。

擦れ違う車もほとんど無かつた。僅かに一台、途中の避難地帯に赤い車が乗り上げ、砂の上に難破しているのを見掛けたくらいだ。扉は開かれて、誰も乗っていないようだった。他の車に乗り合つて下山したのだろうか。手許のパンフレットに抛れば、祭りは雨天決行らしい、今頃は頂上を目指して藁の蛇がこの山路を腹這いに進んでいるのだろう。予定では蛇が燃やされる頃合いにバスが到着して、抽選で選ばれた乗客の誰かが点火式に参加出来るということであつた。別段それが目当てというわけでは無かつたが、万が一、抽選で選ばれたらどうしようかと要らぬ心配をしてみたりもするが、一面真白な景色には何の効力も無かつた。男は読み飽きたパンフレットを鞆に仕舞い、霧の中へ視線を注いだ。

バスは崖に沿つて渦の中を上昇していく。途中、バスが速度を緩めたので、男は擦れ違う車を見物しようと姿勢を正した。青い普通車が尋常では無い速さで坂を下つていく、運転手の顔は強張つていた。事故だ、男はそう思つて出来る限り車を追いかけた、耳障りな制動音が聞こえたかと思うと、どすんと凄まじい音が聞こえた。落ちたのだ。最後部の席に座つていた親爺が叫んだ、事故だ、落ちたぞ。

一体どうなつてゐるのだ。男は捲つていたシャツの袖を元に戻した。徐徐に斜度が強くなつていく。男の眼は窓の外を見続けていた。他の乗客にしてもそうしてゐた。誰の心にも引き返したほうが好いのではないだろうかとの疑念が湧き上がつてゐた。すると、アスファルトの上を車にも乗らずに、走り去つて行く人の姿が見えた。坂の傾斜に耐えかねて転がるように走つて行く、顔は山深い霧より

も一層蒼白く見えた。車を盗まれてもしたか、それとも、何かに追われているとか、それにしても何に、それとも、それともやはり何か起きたのだ、頂上か、少なくとも道中で、何かが。バスはそれでも止まらなかつた。

慌てるようにして逃げ去つていく人の姿は一人だけでは無かつた。乗り越えるのも億劫なのだろうか、ガードレールの切れている処まで駆けて行き、崖を滑り落ちる若者達や、それに幽かに叫んでいる様に聞こえる親子の姿を見た、子供を下山させる為に、谷へ降ろそうとしつかり我が子を抱きかかえていた。いよいよ緊急事態だ、男は、立ち上がつて英雄じみた決断を宣言する機会を窺つていた。唾を飲み、一声上げようとすると、下品な声に先を奪われてしまった。おい、便所、空いてねえぞ、誰だ、早く代われよ、俺ア糞してえんだ。

男は再び不安の裡に連れ戻された。そうだ、別に誰でも構わないのだ、さっきの見苦しいあいつでも好いのだ、誰かが言い出すのをここでじつと待っていれば、それで。けれども乗客は誰もが同じことを考えていた、沈黙の裡に。男が不安に苛まれている間にも、逃げ惑う人の顔は窓の外を通り抜けていつた。

男はもう重苦しい沈黙とそれが醸造する不安に耐えかねつつあつた、それにこうして、ただ座るだけの在り方に何の意味が有ると云うのだろうか、九月の山並みにも木の葉の色彩を眼を通して解析するのも飽き飽きだ、何かが起きていて、その出来事と窓一枚で隔絶されていることに我慢ならなかつた。しかし、どうしろと云うのだ、どうしようも無いのに。男は諦めて、眠気に身を委ねた、そうする他なかつた。

男が再び眼を覚ましたのは、暑さのせいだつた。顔を掌で撫でると、びっしりと汗をかいてゐた。窓の外を横目で見遣ると、霧は以前よりもずつと濃く、仄かに緋色に染まつてゐた。そして、ゆつくりと熱と色とは強さを増してゆくようだつた。

足跡 草津出

約半年ぶりに降りた北の大地は想像していたほど寒さを蓄えてはいなかった。無論寒いのは当然だ。しかし足の裏から伝って来る冷気は体温を吸い上げるには少々心許ない。冬靴を履かずに来てしまつて冷や冷やしていた僕にとつてそれは拍子抜けも良いところだった。そもそも地面のコンクリートがむき出しになつてゐる時点でなにか様子が違う。例年ならばコンクリートは雪に覆い隠されそれを自動車は排ガスが溶かし地面には天然のスケートリンクが完成する。さらに冬が深まればそこに天然の羽毛布団が覆いかぶさるといふのに。それを漕いで歩いていくのはかなりの重労働だから雪がないことに越したことはないのだが如何せん僕は違和感が拭えなかった。冬らしくないという違和感が。

僕はバスから降りて実家までの道を歩き始めた。いつもならば滑る足元に細心の注意を払いながら一歩一歩着実に歩を進めるところなのだが今回の僕の足取りは軽かった。コンクリートがむき出しの道だから滑る心配もなくまた雪が靴に染み込んで来ることもなかった。だがその僕と地面の一進一退の攻防が繰り広げられることもないのかと思うと少し寂しい気もしてしまう。だが依然足取りは軽い。この積雪量で今年の雪まつりは無事に開催できるのだろうかなどどうでもいいことを考えながら僕は歩き続けた。

雪が少ないといえども時々頬を掠める風がやはり地元に戻つてきたのだなと実感させた。冬將軍が僕の耳や鼻を削ぎ取らんと斬り掛かつてくる。僕は必死に手で覆い隠しながら実家へと急ぐ。この寒さは東京の風とは異質なものであった。地元の風は東京のそれよりも少しばかり尖つてゐる。もうすぐ実家に到着するといふのが救いだつた。このまま外にいたら凍え死んでしまう可能性だつてなくはない。そういうえば昔外で飼われていた近所の犬が一晩で凍死し翌朝には板になつていたというのを聞いた。犬死には御免だつた。

僕の実家は高台の上に位置しておりそこから下の様子が見渡せる。といつても特にそこまで都会という訳ではないので特に夜景が綺麗という訳でもない。といふかそもそも真剣に見下ろしたこともなかった。そんなに夜景が見たけりや小樽かそれとも函館にでも行けばいいのだから。

実家の近所には高台公園という愛称で呼ばれる公園がもう一段高いところにある。中々立派な公園でグラウンドなんかも存在していた。どうやら救急ヘリの着陸場所になつてゐるらしくたまにプロペラの騒音が鳴り響くのだがそれもまた乙というものだ。ただし普段は地元の少年野球チームがグラウンドを占領しておりそれ以外の人間はあまり使う機会がない。まるで入団せよと無言の圧力をかけられてゐるようだったが僕は断固拒否した。だが王の圧政に一市民が適う筈もなく僕ら

は少年野球が練習をやつていない日だけこそと遊ぶしかなかった。尤もそんな横暴なる少年野球チームも冬になると雪の積もつたグラウンドでは王政をふるうことができなくなる。そうなれば野球チームに入団してない子供たちは一斉にはしやぎ出すのだ。まるで暴君を打ち倒した国民のように。しかしこの積雪量ではそんな冬の風物詩を拝むことも難しいかもしれない。

ただし雪が少ないことが必ずしも悪いことであるという訳ではない。むしろ子供から卒業を果した僕らにとつて尤も大人になつたという少し弊害があるがそんな僕らにとつてそれは良いことのほうが大きかつた。雪が積もると雪かきをしなくてはいけなくなるからだ。子供の頃は雪が降るのが待ち遠しくて雪が厚みを増す分だけ嬉しさが増すものだつたが子供であるという言い訳が通用しなくなつた今はもうそんな気分ではいられない。むしろ気分は積雪量に反比例すると言つてもいいだろう。雪を見てはしやいでいた自分は年々遠くなつていく。大人たちが折角積んだ雪を意気揚々と打ち崩す子供たちを見ると僕にもこんな頃があつたのだろうかといふ思つてしまう。今年はそのような無意味なノスタルジーに浸る必要もないのだからきつと。良かったのだろう。

そろそろ実家が見えてくるころだ。僕は振り返つて今まで歩いてきた道を見下ろした。下には町一番の大きさを誇るスーパーが見えた。しかしリニールしたようで見慣れた外見がすっかり色も形も変えていた。そしてその所為か見慣れた町がすっかり変わつてしまつてゐるのかのように見えた。いや実際細々としたところが変わつてしまつてゐる。いつの間にかパチンコ屋が潰れてしまつたらしい。飲食店も入れ替わりが激しいようだ。しかし僕はパチンコ屋なんて行かないし元々あつた飲食店にも一度も立ち寄つたことがなかつたから別にどうでも良い。モスバーガーの店舗が更地になつてゐた。そこに新しく齋場ができるらしい。最近齋場が増えてきたように感じる。でも僕がこれらの施設の厄介になるのはまだ当分先だろう。別にどうでも良い。どうでも良いけどもしかすると町も老いていくのだからかと思つた。

けれども実家は変わらずそこに建つてゐた。なんの変哲もないただの一軒家だ。ただの一軒家だが僕にとつてそれはただの一軒家ではなかつた。僕はドアに手を掛けた。ドアは防寒のため少し重かつた。僕は力を入れてドアを引いた。頭にバラバラと冷たいものが降つてきた。粉雪だつた。僕は後ろを振り返つた。僕の立つてゐるところを終着点として足跡が続いてゐた。僕は急に寒くなつた気がして足早に家の中へと駆け込んだ。



スケッチ

林羽夢

両隣に押しつぶされるようにして立っている小さな一軒家。重たい玄関の扉を開けて廊下を三歩進めば、駆け上がるのが楽しい螺旋状の階段が右手に現れる。これを上って二階の廊下を右に曲がれば、私の聖地、マイルームの扉に辿り着く。記念すべき初スケッチの舞台は春休みの大半を過ごしているこの部屋だ。

ただ部屋をスケッチしただけでは面白みに欠けるので、指人形のDさん(仮名)に協力をお願いし、彼の視点から部屋を一回りしてみることにした。

非力なDさんの為、部屋の扉は少し開けておく。僅かな隙間から覗き込む自室は、大きい家具が多いせい、具の多いカレールを連想させる。

Dさんは勇んで部屋に入った。先にも述べた通りこの部屋には大きい家具が多いため、小さなDさんにとって難関といえる場所が幾つか存在するが、今回のスケッチにおいて、私の指導の元、彼の安全は確実に保証されているので安心してほしい。それはそれとして、部屋に入ったDさんにまず襲い掛かったのは、洋服が乱雑にかけられた洋服掛けのジャングルである。だが心配無用、このジャングルを通らずとも、この部屋を回ることには出来る。Dさんがジャングルを横目に進んでいる間、このジャングルについて説明しよう。これは一見するとただの洋服掛けなのだが、使いそうで使わないバッグが四つほど紛れている為に、妙にごちゃごちゃした印象を与えている。おまけに扉を開けてすぐのご対面なので、この部屋を狭く思わせる要因にもなっている。ここを整理すればもう少し快適な部屋になるかもしれないが、長年放置して埃も多いので、手を出す勇気がまだ出していない。

さて、ジャングルを過ぎた後、Dさんの左に大きなピアノが現れた。人間からすれば小さな電子ピアノだが、指人形である彼にはちよつとした宮殿のようである。より良いスケッチを書くために、Dさんを床からピアノの上へと移動させる。鍵盤を覆うハードカバーにはうつつらと埃が積もっており、Dさんが歩いた所だけ元の茶色が顔を出した。足が埃だらけになるのは嫌だというDさんの文句に応え、おしりふきでハードカバーをさっと拭く。普段ならここに本やおもちゃが乗っかっているのだが、大晦日に掃除したから何も無い。綺麗になったカバーの上を、Dさんはゆつくりと歩いていく。右手側は崖になっていて、もしも足を滑らせてしまったら一巻の終わりである。決して狭い道ではないが崖の方へ向かって斜めになっているので気を付けなければならぬ。まあ、もしDさんが落ちそうになっても、人間である私が支えるのだから何も心配することは無いのだが。

Dさんの左側には、譜面を置くところがある。この譜面台は折り畳みが可能なのだが、私は譜面台が立っている方がよりピアノらしいと思うのでその機能は使

わない。昔はこの譜面台に楽譜を置いて弾き語りなんかをしたものだが、ピアノをやめた今ではもうただの飾りではない。鍵盤カバーと同じく薄い埃を携えて、楽譜が腰かけてくれるのを待っている。

譜面台が終われば、次は銀のCDプレイヤーが見えてくる。レトロチックな茶色の電子ピアノの上で重く構えるこの近代的な機械は、森の中に立つビルのような異様さを感じさせる。

いつまでもピアノを描いていても仕方がないので、次に移ることにする。鍵盤カバーを見事渡り終えたDさんの眼前には、人間一人は入れそうな大きな谷が広がっていた。対岸は机になっており、ピアノと机の間に本棚が設置されているためにこのような谷ができてしまったのだ。もちろん、協力してくれているDさんを危険に晒すわけにはいかないので、ちゃんと対岸まで私の手で連れていく。通過した本棚は、本以外にもゲームの入れ物やCDがしまわれていて、ちよつとした物置のようになっていた。中身についての細かい説明は完全なるプライベートなので割愛。次なるスケッチ場所は妹の学習机だ。何年前に買ったかはよく覚えていないが、とてもきれいに使われている。Dさんが足を滑らせそうになるほどにその表面はなめらかで傷一つなく、雑に置かれた小物さえなければ、Dさんたち指人形にとってはスケートリンクにもなり得るだろう。この机にも先述した小物の他に様々なものが置いてあるが、流石に妹の物を晒し上げることもできないのでやはり割愛。Dさんには、妹の机と向かい合うようにして置かれた私の机に移動してもらおう。部屋のスケッチはこの机で終わりにするつもりだ。

私の机は、妹のものより古いから知らないが淵の所がひび割れている。表面はツルツルとしたものでコーティングされており、こちらも滑りやすい。面積は妹の机と同じだが、ノートパソコンや木製の本立て、外出用に買ったポケットティッシュの余りなんかが乗っているせいで狭苦しく感じられる。特に横幅約三十七センチのパソコンは机の右半分を陣取る形で置かれていて、Dさんから見れば自分の腰くらいの高さの広々とした四角い丘があるように感じられる。Dさんはひんやりとしたパソコンの上へよじ登り、視線を更にも上へと滑らせた。一月前まで使っていた教科書や、明らかに二十四色以上はある色ボールペンの詰まったペン立て、「苦あれば楽あり」と書かれた謎の紙(高校受験の時、自分を鼓舞するために書いた)などが瞳に映っては過ぎていく。謎の紙から更にも上へと注意を向ければそこには私の好きな小説が置かれた机の頂上があるのだが、蛍光灯の真っ白い光を直視してしまうことになるので、Dさんはそこを見るのができない。

仕方がないので、Dさんには机の左側を見てもらうことにする。左側は壁に面しているため落ち着きがあり、心なしか少しだけ暗い。パソコンの丘から降りたDさんは、余ったポケットティッシュたちを踏み越えて木製の本立ての前までやって来た。パソコンが机の右側を支配する存在だとすれば、この本立ては左側を支配していると言っても過言ではない。パソコンのような広さは無いが、Dさんの身長は四倍ほどの高さがある。我々人間からすれば単なる本立てだが、彼からすればちよつとした扉である。これ以上先に進むのは困難なようだ。

本立てには小さめのノートが数冊立てかけてある。私はどうも昔から無駄にノートを買う癖があるので、まだ使っていないものがいくつも混じっている。全部メモに使うのだ。

この本立ての他に、机の左側には辞書が置かれている。国語辞典、英和辞典、古語辞典、使い道の分からない羅和辞典（ラテン語の辞典）なんでももある。辞書といえば、私は紙が一番だと思う。あのページを一枚一枚めくっていく時の音、紙の発する懐かしい香りの安心感、頼りになる厚さ、どれを取っても紙の辞書は最高だ。適当なページを開いて面白い言葉を探すことも、紙の辞書でなければできない。だが生憎持ち運ぶには重過ぎるので、学校には洪々電子辞書を持ってきている。もしどこかに置いておけるのなら、紙の方を持って行きたいのだが。

辞書の話はさておき、Dさんの旅は本立ての前で終わりとなった。普段暮らしている部屋でも、指人形という低い視点から見ると、山や谷や崖などに早変わりする。そう考えれば、インドアという言葉はあまり正確ではないのかもしれない。もし私たちがDさんのように小さければ、家に居ながらアウトドア生活を送ることができたのだから。

それでは最後に協力してくれたDさんと読者の皆さんに、心を込めて感謝の言葉を。

ありがとうございます。

著者紹介

草津出（くさつ・いづる）会長。東洋大学文学部日本文学文化学科所属。  
眼鏡。

三〇〇 学生。東洋大学社会学部社会福祉学科所属。  
眼鏡。挿画提供者だったが今回満を持して執筆。

星井靄（ほしい・あい）学生。東洋大学文学部哲学学科所属。  
裸眼。前会長。

林羽夢（はやし・はむ）学生。東洋大学文学部哲学学科所属。  
眼鏡。

新白山文学 vol.5

編集 佐々木唯

2016年3月21日

発行 文藝サークル“綴”

<http://ttuduri.web.fc2.com/>

bungei\_ajo@hotmail.co.jp

<http://ttuduri.blog.fc2.com/>

[https://twitter.com/toyo\\_tuduri](https://twitter.com/toyo_tuduri)

ハッシュタグ #新白山文学 にて感想お待ちしております。